悠久の名作シリーズ（15）

『子夜呉歌』　李白

思う人と会えぬ女性の悲しさをうたう

子夜呉歌　李白

長安一片月
萬戸擣衣聲
秋風吹不盡
總是玉關情
何日平胡虜
良人罷遠征

子夜呉歌　李白

長安一片の月
萬戸衣を擣つの聲
秋風吹いて盡きず
總て是玉關の情
何れの日か胡虜を平らげて
良人遠征を罷めん

【意　解】

長安の町に冷たく下界を照らす月ひとつ（夫も遠征の地で故郷を偲びながら同じ月を眺めていることだろう）どこの家からも衣を打つ砧の音が聞こえる。秋風は寂しく吹いてやまない。これらは全て玉門関にいる夫を思う気持ちをつのらせる。

ああ、いつになったら北方の胡を平定して夫が無事に帰ってくるのであろうか。

【解　説】

李白の「子夜呉歌」は、春夏秋冬の四季をテーマに四首の連作に仕立てており、ここに取りあげたのは第三首で、秋の歌に当たるものである。

当時、玄宗皇帝による辺境征伐のため、多くの人民が戦地に駆り出され、残された家族や妻たちは生活に苦しみ、離別を悲しんでいた。

月、砧の音、秋風、これらすべて戦地の夫を思い出させるものばかりである。

「砧」とは、衣を載せて打つときに使う石の台で、衣服を作るため絹や麻の布などを砧にかけて打つことを「衣を擣つ」という。

また洗った布や衣服をたたいて、やわらかくして、同時に目をつめて、つやを出すのに使う道具だという説もある。婦人が秋の夜なべ仕事とし

砧（きぬた）

て行っていた。
この詩句に関連してうたわれた句や歌

（紀貫之）
から衣　うつこゑきけば
月きよみ　まだねぬ人を
空にしるかな（新勅撰和歌集　巻五）

（藤原雅経）
み吉野の　山の秋風
さ夜更けて　ふるさと寒く
衣うつなり（新古今集　巻五）

（芭　蕉）
声すみて　北斗にひびく　きぬたかな

（子　規）
夕月や　砧聞こゆる　城の内

（佐藤春夫）
都は空に月冴えて
巷巷に打つ砧
野分にまさる　すさまじさ
みな前線を慕ふ音
醜の胡ら　ことむけて
君かえります日はいつぞ（玉笛譜）

（土岐善麿）「妻のなげき」
都の空の月さえて
きぬたぞひびく家ごとに
ただふきしきる秋風の
関路にかよふ　うきおもひ
いつか　あだをうちはてて
帰るわが夫を迎えまし（新版鶯の卵）

子夜呉歌は、六朝時代に呉の地で民間に流行した歌曲の題で、東晋のころに子夜という女性が作って歌っていたが、その曲はたいへんもの悲しく哀調をおび、当時の人々に愛誦された。

そして、同じ曲によって幾つもの歌詞が作られ、「子夜歌」とか、春夏秋冬をうたった「子夜四時歌」とかよばれた。また東晋は呉の地に都していたので、「呉歌」、「呉声曲」ともよばれた。

その後、唐時代の詩人も古くからの楽府を用いて、新たな詩を付け、替え歌を作ることをしばしば試みており、李白もまた四季をテーマに四首の連作を仕立てており、ここ

に取り上げたのは、第三首の「秋の歌」にあたるものである。

しかし李白の時代には、すでに東晋のころの「子夜呉歌」の旋律は残っていなかったようで、「子夜呉歌」と名づけても、それは旧曲のような旋律をもつ替え歌ではなく、いわばその趣向にしたがう独立した新たな作品であった。舞台も、呉の地方から北の長安へと変化させているが、それでも元の民間歌謡の味わいを保ち、歌われる詩としての流れるような運びが顕著である。

この詩の第一句の「一片の月」は視覚に、第二句の「衣を擣つ」は聴覚に、第三句の「秋風」は聴覚と肌身に訴える表現をとっており、特に「月」は遠く隔たったものへの思慕を誘うもので、そうした取り合わせがすでに感傷的な雰囲気を十分に構成し、加えて戦場の夫を思いやる妻の心情の深さと哀調を効果的にしている技巧は、李白ならではだろう。又、第五句、第六句の「何れの日か胡虜を平らげて、良人遠征を罷めん」は、夫の安否を気づかう妻の哀感が現実感を持って迫ってくるようで、多くの妻たちが夫を戦地に奪われたそのような時に、李白は「子夜呉歌」の表現様式をとりあげ、妻になり代わって、苦しみや悲しみを世に問い、暗に玄宗皇帝の政策を戒めようとする意図があったとも考えられる。（無用の出兵が、妻や家族をも苦しめていることへの怒りが作者の心に湧いていたことであろう。）そしてこの二句が有ることにより、また、絶句とは違った民謡らしい興趣がある。

【参　考】

「子夜呉歌」四首連作の他 三首

其の一「春の歌」

秦地羅敷女　秦地の羅敷女
採桑緑水辺　桑を採る　緑水の辺
素手青条上　素手　青条の上
紅粧白日鮮　紅粧　白日に鮮やかなり
蚕飢妾欲去　蚕は飢えて　妾は去らんと欲す
五馬莫留連　五馬　留連する莫れ

秦の家の娘、羅敷が緑色の水の辺で、桑の葉を摘みとっている。その白く美しい手は青い葉の上で動き、化粧した顔は、真昼の光の中で輝いている。

蚕がお腹をすか

玉門関（遠景）

しているので、私は早く帰らなくてはなりません。太守さまも、ぐずぐずしないでお帰り下さい。

（漢代の楽府「陌上桑」に登場する有名な美女）羅敷が、桑摘みをしていたところ、土地の太守が五頭立ての馬車で通りがかり、彼女を誘いかけたが、彼女はきっぱりと断って夫自慢をした話）

其の二　**「夏の歌」**

鏡湖三百里　鏡湖　三百里
菡萏発荷花　菡萏　荷花を発く
五月西施採　五月　西施が採る
人看隘若耶　人は看て　若耶を隘くす
回舟不待月　舟を回らして　月を待たず
帰去越王家　帰り去る　越王の家

周囲が三百里もある鏡湖、その湖一面に蓮の蕾が花開いた。

夏の盛りに（美女で名高い）西施が実を採っていると、その美しさに見惚れた人々で、若那溪も狭くなるほどだ。

西　施

西施は月が出るのも待たず舟を返し、越王の家へ帰って行く。

其の四　**「冬の歌」**

明朝駅使発　明朝　駅使発つ
一夜絮征袍　一夜　征袍に絮す
素手抽針冷　素手　針を抽くこと冷やかに
那堪把剪刀　那ぞ剪刀を把るに堪えんや
裁縫寄遠道　裁縫して遠道に寄す
幾日到臨洮　幾の日にか臨洮に到らん

明日の朝には荷物を運ぶ使いが出発する。今夜急いで軍服に綿入れをする。

針を持つ白い手は冷たく悴かんで、鋏を取るのも耐えられぬ。

縫いあげて遠くにいるあなたに送る。でも、はるかかなたの臨洮へはいつ着くのでしょうか。

【探　求】

四首連作があるがゆえの見方として。

「春」では桑を摘み、「夏」には蓮の実を採る。「秋」は衣を打つ。「冬」は針を持つ。

それぞれが女性の仕事とされており、夫への思いを導くものとなっている。また興味深いのは、一日の時間としても朝から昼、昼から夕方、そして夜へと移っていることである。

また別の角度からみると、「春」と「夏」は伝説の美女を描き、「秋」と「冬」は、当時の都長安の情景であり、歴史的な時間も移り変わっているといえる。

すなわち「春」から「夏」「秋」「冬」へと進んでいくと同時に、いつのまにか過去から現在へと視点を動かされているように見え、単に「秋」から「冬」への続きではなく、四首の締めくくりとして「冬」を堪能させている。

そして、地名においても、「春」「夏」「秋」は、第一句目の最初に持ってきており、「冬」の詩だけは最後に置かれていることである。それは詩がうたわれている場所ではなく、その心が向かう場所といえるのではないだろうか。

いずれにしても、李白の「子夜呉歌」は四首をまとめて読んでこそ、その真価が見えてくる。